1830年代のアジア協会員におけるインド建築と西方の外来民族との関係性

アジア協会員によるインダス川流域の建築にかんする解釈

THE RELATIONSHIP BETWEEN INDIAN ARCHITECTURE AND THE FOREIGN RACE COMING FROM THE WEST IN THE MEMBERS OF THE ASIATIC SOCIETY IN THE 1830'S

The interpretation of the architectures in the Indus basin by the members of the Asiatic Society

高松 由子*

Yuko TAKAMATSU

In "The Journal" of the Asiatic Society, the monographs on the architectures in the Indus basin concentrate in the 1830's. In their monographs, the members of the Society took an attitude which they discovered some ancient towns had been advanced by Alexander's army. And they related the remnants of some old buildings with the trend of the foreign race coming from the West, for example the rule of the Persian Empire, the Alexander's expedition and the rule of Bactrian kingdom.

Keywords: the 1830's, Asiatic Society, views on Indian Architecture, the Indus basin, Alexander's expedition to India, Bactrian kingdom

1830 年代, アジア協会, インド建築観, インダス川流域, アレキサンダーのインド遠征, バクトリア王国

1. 序

アジア協会¹⁾(設立 1784、以後「協会」と略記)は、インド研究の発端的な地位を占めた団体であり²⁾、当初から、協会員たちは、インド建築に関心を寄せていた³⁾。また協会における研究活動は、初代会長ジョーンズ(Sir William Jones, 1746-94、会長在任 1784-94)の死後、一旦衰退したとはいえず⁴⁾、第4代会長コールブルック(Henry Thomas Colebrooke, 1765-1837、会長在任 1804-15)と幹事ウィルソン(Horace Hayman Wilson, 1786-1860、幹事在任 1815-32)によって復興された⁵⁾。そして 1830 年代以降、協会では、ジョーンズの時代以上に、インド建築に関連した論文が寄稿されるようになった⁶⁾。なかでも、インダス(Indus)川流域の建築にかんする論文は、1830 年代という時期に集中している⁷⁾。

しかし、これまでの日本では、ファergusson(James Fergusson, 1808-86)の著書がインド建築研究の基点となっており⁸⁾、彼以前の英国人によるインド建築観については、注目されてこなかったきらいがある⁹⁾。

ただし、前田耕作は「後記」『アレクサンドロス古道¹⁰⁾』(1985)において、17 世紀から 20 世紀前半までのヨーロッパ人によるインド研究の経緯を解説しつつ、彼らのインド建築観については、1830 年代の時代的な雰囲気についての言及している。すなわち当時、インダス川流域を訪れたヨーロッパ人にとって、「目に映るものは、どれもアレクサンドロスの刻印があった¹¹⁾」と述べている。

それゆえ本稿は、ファergusson以前の、1830 年代の英国人によ

るインド建築観にかんするさらなる様相を明らかにするために、この時期に協会員たちが寄稿した、インダス川流域の建築にかんする論文を分析する。

ところで、ファergussonは『インドと東洋の建築の歴史¹²⁾』(1876)において、インド建築史は、アショカ(Asoka the great、在位 B.C. 268-32)の時代から始まると指摘し¹³⁾、インド建築は、「まず、アレキサンダー(Alexander the Great, B.C. 356-23)の侵入、そしてその後は〔中略〕バクトリア王国¹⁴⁾(Bactrian kingdom)の建国という、西方世界との接触によって〔中略〕導かれた¹⁵⁾」と記した。

これにたいして、18 世紀後期の協会員たちのインド建築観には、著者がすでに前稿で指摘したように、ファergussonのそれとは異なるものがみられた。すなわち彼らは、インド建築の起原を、アレキサンダーのインド遠征(B.C. 327-25)よりも古い時代に遡ることができると考えた。そしてインド建築は、それ固有の起原をもち、ときにはギリシア建築の起原であるという、起源論的な発想を抱いた¹⁶⁾。

ただし協会では、ジョーンズの死後の 1790 年代後半、研究活動が衰退しつつあったとはいえ、文献研究の成果から、インド史の基点を、チャンドラグプタ¹⁷⁾(Chandra Gupta、マウリア王朝の始祖、在位 B.C. 317-293)の即位年に設定するという試みがあらわれた。この試みは、アレキサンダーが進軍した古都群を発見するという課題を残した。またインド史のなかでも、チャンドラグプタとほぼ同時代の、ダレイオス 3 世(Darius III, 在位 B. C. 336-30)統治下の

* 設計機構 由 主宰・博士(工学)

Chairman, Design Organization Yū, Dr. Eng.

ペルシア帝国による支配、アレキサンダーの進軍、バクトリア王国による支配という、「西方の外来民族¹⁸⁾ (foreign race coming from the West)」による動向が注視されつつあった¹⁹⁾。

そして19世紀初頭、東インド会社は、シク王国との友好政策を開始した。ランジット=シング (Ranjit Singh、シク王国の首領) とアムリツァル条約を締結し (1809)、サトレジ (Sutlej、図1) 川以東の地を獲得した²⁰⁾。さらに、協会の研究活動が復興した1830年代、協会のなかには、この政策に乗じて、インダス川流域を訪れる者たちがいたし、他のヨーロッパ人によっても、この地域に建っている建築にかんする情報が、協会に提供された。

こうした、ジョーンズの死後から1830年代までの協会をとりまく状況を考えると、1830年代の協会員によるインダス川流域の建築にかんする研究には、アレキサンダーが進軍した古都を発見しようとする姿勢や、建築を、アレキサンダーを含む、「西方の外来民族」による侵入や支配に結びつけて解釈しようとする姿勢がみられるかもしれない。

もしそうならば、こうした研究姿勢のあらわれは、前時代に抱かれていた起原論的な発想が希薄になり、ファーガソンのインド建築解釈に近づきつつあるという、協会のインド建築研究史におけるひとつの変換期を意味しているとも想像される。

また建築が、アレキサンダーの進軍だけではなく、ペルシア帝国やバクトリア王国の支配に結びつけて解釈されていたとするならば、1830年代のヨーロッパ人にとって、「目に映るものは、どれもアレクサンドロスの刻印があった」という、前述の前田耕作による言及とはいささか異なる様相を示していたと言えるであろう。

よって本稿は、1830年代の協会員たちによるインダス川流域の建築にかんする論文を分析する。そして彼らの研究に、建築とそれが建っている場所を、アレキサンダーを含む、「西方の外来民族」による動向に関連づけて解釈する姿勢がみられたことを指摘する。

2. 背景としての協会における研究の状況

本項では、1830年代以前の協会におけるインド研究状況を、「歴史²¹⁾」、仏教の「古代遺物」という順に解説する。

ジョーンズは論文「第10記念講演—アジアの歴史、文化、民族²²⁾」(『アジア研究²³⁾』第4巻、1795(ジョーンズが死亡した翌年))において、メガステネス²⁴⁾ (Megasthenes) による『インド誌 (Indika)』を、サンスクリット文献である『プラーナ (Purana)』や戯曲『ムドゥラー・ラクシャサ (Mudra Rakshasa)』と比較した。『インド誌』に登場するインド人サンドラコッ투스 (Sandracottus) が、チャンドラグプタであったこと、また彼の首都パリボッタラ (Palibothra) が、現パトナ²⁵⁾ (Patna) にあったことを指摘した。そして、チャンドラグプタの即位年をもって、インド史の基点が設定できると論じた²⁶⁾。

協会員ウィルフォード (Francis Wilford) は論文「ヒンドゥーの年代記について²⁷⁾」(『アジア研究』第5巻、1798) において、ジョーンズの見解を支持するさらなる証拠を提示した²⁸⁾。すなわち、古代ヒンドゥーの地誌学を著わしたサンスクリット文献『タクシャ・シーラ (Tacsha-sila)』を検討し、パリボッタラの所在地を、アレキサンダーが進軍した古都群 (たとえばバクトラ (Bactra)、カブール (Cabul)、バーミヤーン (Bamiyan)、アラコシア (Arachosia、現カンダハール (Candahar)、タキシラ (Taxila)、サンガラ (Sangala)) の所在地を

基点に、方位と距離とを算定した。そしてパリボッタラが、現パトナにあったことを発表した²⁹⁾。さらに、アレキサンダーが進軍した(バクトラを除外した) 古都群にかんする歴史について発表した。彼によると、原住民はヒンドゥーであったが、ダレイオス3世の時代にペルシア帝国の支配下³⁰⁾におかれた。のちにアレキサンダーが侵入し、彼が残したギリシア人によって入植された。そして彼らは、ヒンドゥーと文化的に同化した。アレキサンダーの死後、バクトリア王国のギリシア人君主たちが支配した。のちに王国は、インド=スキタイ人³¹⁾君主たちによって継承された³²⁾、と。

しかし当時の協会では、前述のアレキサンダーが進軍した古都群を発見できていなかった。それゆえ、パリボッタラの所在地を特定できないという理由から、ジョーンズの見解に異論が出された³³⁾。

のちの1830年代、協会員たちは、ギリシア・ローマの文献と中国の歴史書から、ムスリム政権以前のインダス流域が、バクトリア王国 (B. C. 250-120 頃) の滅亡後、カニシカ (Kanishka)、フシカ (Hushka)、ヤシカ (Yashka) という名前の、西アジアから侵入したスキタイ人によって支配されたと認識していた³⁴⁾。

また1850年代の英国において、「先史時代 (prehistory)」という概念があらわれた³⁵⁾。1920年代以降、インダス文明が、先史時代の遺構として認識されるようになった³⁶⁾。

ところで、協会員による仏教の「古代遺物」にかんする最初の研究は、ダンカン³⁷⁾ (Jonathan Duncan) による論文「ベナレス近郊にある2つの骨壺の発見にかんする報告³⁸⁾」(『アジア研究』第4巻、1795) である。1794年、彼は、サールナート (Sarnath) のストゥーパに孔をあけ、骨壺を発掘した³⁹⁾。論文において、「骨壺のなかの骨は、仏陀を礼拝する人々 (インドの異教徒たちの集団) のものである⁴⁰⁾」と記した。

19世紀四半前期、協会員たちは、キリスト教宣教師による報告書と中国の歴史書をもとに、インダス川流域では、バクトリア王国滅亡後に、仏陀を礼拝する宗教が流布したと認識していた⁴¹⁾。

1808年、英国人エルフィンストーン中尉⁴²⁾ (Mountstuart Elphinstone、1779-1859、東インド会社の軍人) は、[マニキヤラ⁴³⁾ (Manikyala) の大塔]⁴⁴⁾ (以後 [大塔] と略記) を視察した⁴⁵⁾。報告書において、[大塔] は、「実的な技術力をもたない原住民の手を使って建設させた、[中略] ギリシアの建築である⁴⁶⁾」と記した。

1830年、フランス人ヴェントゥーラ将軍 (Chevalier Ventura、ランジット=シングの傭兵) は、[大塔] に孔をあけ、古物群 (硬貨、宝石、骨壺、頭髮) を発掘した⁴⁷⁾。報告書において、[大塔] は、アレキサンダーが建設した、「彼の愛馬ブケパラス (Bucephalia) を埋葬した墓⁴⁸⁾」だと記した。

3. 会誌群に掲載されたインダス川流域の建築にかんする論文

協会員たちが寄稿した論文は、『アジア研究』(第1・20巻、1788-1839) 誌と、通称『ジャーナル⁴⁹⁾』(第1-73巻、1732-1904) 誌に掲載されている。また、協会は『アジア協会 1784-1884 にかんする百年間の回顧⁵⁰⁾』(1885) において、これまで上記の会誌群に掲載してきた論文を、いくつかの研究分野に分類している。

論文は、3階層に項目が立てられ、分類されている。まず「考古学、歴史、文学など」と「自然科学」とに大きく分類されている。前者は、さらに「古代遺物」「硬貨」「古代インドのアルファベット」「歴

史」「言語と文学」に分類されている。つぎにこの「古代遺物」は、「古代の記念物」「石窟」「彫刻」「碑文」「銅板彫刻」「奉納物」に細分されている。この「古代の記念物」あるいは「石窟」に分類された論文のなかから、インドのものを研究の対象としている論文を抽出すると、1780-90年代には8論文、1800-10年代にはなく、1820年代に3論文、1830年代には33論文、1840年代には27論文あった⁵¹⁾。

上記の1830年代に寄稿された33論文中、インダス川流域の建築にかんする論文は、『ジャーナル』誌に掲載された、協会員バーンズ(Sir Alexander Burnes, 1805-41)の論文(1833)、協会の幹事・会誌群の編集長プリンセプ(James Prinsep, 1799-1840、幹事・編集長在任1832-38)の論文(1834)、そして協会員・通称マッソン(Charles Masson, 1800-53, formerly James Lewis)の論文(1837)であった。

以下、この3論文の内容について分析する。

4. バーンズの論文(1833)

4-1. 論文の概要(図1、図2)

バーンズ(東インド会社の軍人、通訳、外交官⁵²⁾)は、ラホール(Lahore)において、前述のヴェントゥーラが発掘した古物群を視察した。そのあと、ランジット=シングと会見するためにアトック(Attock)へ向かう途中、マニキヤーラ村を訪れ、「大塔」から硬貨群を発掘した(1832)⁵³⁾。そして、論文「パンジャブにおける『墳墓群』とギリシアの遺跡群について⁵⁴⁾」(『ジャーナル』第2巻, 1833)において、古都タキシラの所在地と、「大塔」の建設意図について論じた。

ところで現在の知識によると、インダス川流域に建っているストゥーパ群は、クシャーーン朝時代の紀元1世紀頃から建設され始めた

と推測されている⁵⁵⁾。またマニキヤーラ村には、20棟のストゥーパが建っている⁵⁶⁾。そのなかで最も大規模なものが、8世紀前半に建造されたと推測されている、「大塔」である⁵⁷⁾。「大塔」は、2段の基壇(付柱が規則正しく刻まれている)の上に大ドーム(直径127feet、円周400feet)が載っている⁵⁸⁾。

4-2. 古都タキシラの所在地について

バーンズは論文のなかで、アッリアノス⁵⁹⁾(Flavii Arriani, 95-175)の『周遊記(Periplus)』をもとに、「大塔」が建っているマニキヤーラ村について、以下のように記した。(図1)

マニキヤーラの位置について、幾つかの推測が示唆されているが、私はさしあたり、それを、タキシラ⁶⁰⁾に適合させることを躊躇しない。なぜならアッリアノスが、最も人口の多い、「インダス川とヒュダスベス(Hydaspes)川とのあいだにある都市」であったと、私たちに明確に伝えているからだ。また私は幸運にも、後者の川で、互いに向い合う2つの都市遺跡に遭遇したが、私は、それらを、アレキサンダーが建設したニカイア⁶¹⁾とブケパラだと信じている⁶²⁾。

ここでいう「2つの都市遺跡」の様相について、バーンズは論文のなかで解説していない。

とはいえ、彼は、ヒュダスベス川をはさむようにして残る2つの都市遺跡が、アレキサンダーが建設した古都ニカイアとブケパラだと考えた。そして、これらから西方向に進んだ、インダス川とヒュダスベス川とのあいだに位置するマニキヤーラ村が、アレキサンダーが進軍した古都タキシラだと考えた。

4-3. 「大塔」の建設意図について

バーンズは論文において、自らがラホールにおいて、前述のヴェントゥーラが発掘した骨壺を視察したとき、その骨壺には、数人の人骨が入っていたと言及した⁶³⁾。また「大塔」が、「エルフィンストーンによって紹介されて以来、ほとんどの人々がギリシアの遺跡として認識している⁶⁴⁾」と記した。そして前述のように、「大塔」が建っているマニキヤーラ村を、アレキサンダーが進軍した古都タキシラだと考えた。さらに当時の協会では、アレキサンダーが古都群に残したギリシア人入植者たちは、原住民ヒンドゥーと文化的に同化したと認識されていた。古都群は、アレキサンダーの死後、パクトリア王国のギリシア人君主たちによって支配されたと認識されていた。

図1 インダス川流域の地図

図2 「マニキヤーラの大塔」

図3 「ハラッパー遺跡」の配置図

バーンズは論文において、「大塔」の建設意図について、以下の
ように結論づけた。

〔前略〕私は、それらを、アッリアノスによる『周遊記』の第2巻⁶⁷⁾
のなかで言及されたバクトリア王国の墳墓か、それらのインド=スキ
タイ人後継者たちの墳墓かのいずれかであったと推測する⁶⁸⁾。

つまりバーンズは、「大塔」を、ストゥーパだとは認識できていな
かった⁶⁹⁾。またマニキヤーラ村が、アレキサンダーの死後、マウリ
ア王朝の支配下にあったことも認識できていなかった。彼は、「大
塔」を、ギリシアの建築技術をもって建設されたと考えたのであろ
う。彼は、マニキヤーラ村が古都タキシラであったという自らの見
解を前提に、この村に建っている「大塔」を、アレキサンダーの進
軍以降にヒンドゥーと文化的に同化したギリシア人入植者たちで
はなく、彼の死後に古都群を支配した、バクトリア王国の君主たち
を埋葬した墳墓だと推測した。

5. プリンセプの論文 (1834)

5-1. 論文の概要 (図1、図2)

フランス人クール技官 (A. Court、ランジット=シングの傭兵、非
協会員) は、ラホールにおいて、ヴェントゥーラが発掘した古物群
を視察した (1830-32)。そのあとマニキヤーラ村を訪れ、「大塔」を
調査した。また、「大塔」と同じ外観をもつ15棟の建造物群に孔を
あけ、古物群 (硬貨、骨壺、宝石、真珠) を発掘した (調査年月や、
建造物群が建っている詳細な位置については不明)⁶⁸⁾。そのあと、マ
ニキヤーラ村からカブールへ向かう途中、「大塔」と同じ外観をもつ
幾つかの建造物群に孔をあけ、古物群 (硬貨、骨壺、宝石) を発掘
した (調査年月や、建造物群が建っている詳細な位置については不明)
⁶⁹⁾。そして協会に、自らが発掘した古物群と回想録とを提出した。

プリンセプ (東インド会社の造幣局員) は論文「ランジット=シン
グ藩王の軍隊の技官、A・クール殿による、古代タキシラにかんする手
書きの回想録の引用章句を翻訳した、マニキヤーラの墳墓群にかんす
るさらに進んだ情報⁷⁰⁾」(『ジャーナル』第3巻, 1834) において、ク
ールの回想録を掲載した。そして古都タキシラの所在地と、「大塔」
の建設意図について発表した。

5-2. 古都タキシラの所在地について

クールは回想録の冒頭において、以下のよう記した。

〔前略〕マニキヤーラは、アトックからラホールへと導く本道沿い
に位置する、小さな村の名前である。それは、未知の起源をもつ、
たいへん古い町の遺跡群のなかに建設されている。これらの遺跡群
の地理的な位置と、とりわけ遺跡群のなかで見出された硬貨の豊
かさから、この都市が、インダス川とヒュダスベス川とのあいだの
諸地域首都であったに違いないという仮説を与える。その国を、
古典作家たちはタキシラという名前で知っていたし、アレキサンダ
ーの歴史のなかで常習的に陳述されている⁷¹⁾。

すなわちクールは、マニキヤーラ村を、アレキサンダーが進軍し
た古都タキシラだと推測した。

プリンセプは論文において、クールによる古都タキシラの所在地
にかんする見解に、自らの注釈を加えていない。

しかし彼は、1836年、18世紀後期のウィルフォードによって古
都タキシラの所在地が発表されたが、目下の協会では、マニキヤ
ーラ村が古都タキシラであったと想像されていると言及している⁷²⁾。

つまり、プリンセプは論文において、マニキヤーラ村が古都タキ
シラであったとするクールの見解を、自らの見解として発表した。

5-3. 「大塔」の建設意図について

クールは回想録のなかで、自らがマニキヤーラ村で発掘した硬貨
群と、前述のヴェントゥーラが「大塔」のなかから発掘した硬貨群
を、以下のように誤認した⁷³⁾。彼の見解を要約すると、

最も古いのがインドの硬貨である⁷⁴⁾。ほかには、グレコ=ペルシア
(または純粋なペルシア) の硬貨や⁷⁵⁾、アレキサンダー (またはロー
ーマ人との貿易) によってもたらされた⁷⁶⁾、ラテン文字をもつ硬貨
がある⁷⁷⁾。そして硬貨群の大半を占めているのが、グレコ=インド
(またはグレコ=スキタイ) の硬貨である⁷⁸⁾、と。

つづけて彼は、これらの硬貨群をもとに、マニキヤーラ村の歴史
について言及した。彼の見解を要約すると、

原住民はヒンドゥーであったが⁷⁹⁾、のちに、ダレイオス3世の統下
におかれた⁸⁰⁾。そのことは、目下の原住民の身なり (髪を後ろに束
ね、幅広のズボンをはいている) が、ペルシア硬貨にあらわされて
いる人物の身なりと似ていることから証明できる⁸¹⁾。その後、村は、
アレキサンダーによって横断され、彼が残したギリシア人によって
入植された。彼の死後は、バクトリア王国のギリシア人君主らによ
って支配され、のちに、王国の後継者であるインド=スキタイ人君主
らによって支配された⁸²⁾。それらのことは、息子の産毛を捧げると
いう古代ギリシアの慣習が目下の村で残っていることや⁸³⁾、村で発
掘された硬貨群のなかにグレコ=インド (またはグレコ=スキタイ)
のものがあることから証明できる⁸⁴⁾、と。

すなわちクールは、マニキヤーラ村が、アレキサンダーの死後、
マウリア王朝の支配下にあったことを認識できていなかった。とはい
え彼は、マニキヤーラ村が古都タキシラであったという自らの推
測を前提に、マニキヤーラ村の歴史のなかでも、アレキサンダーが
進軍した前後の出来事に注目している。

また彼は回想録のなかで、前述のように、自らがラホールにおい
て、ヴェントゥーラが発掘した骨壺を視察したと言及した。自らが
マニキヤーラ村で発掘した硬貨群の大半が、グレコ=インド (また
はグレコ=スキタイ) のものであると述べている。

そして「大塔」の建設意図について、以下のよう記した。(図1)

その地方のどこかにいた古代の王の墳墓にすぎないか、ペルシアま
たはバクトリアからの幾人かの征服者による作品かもしれない。征
服者たちは、それを、戦場で倒れた戦士たちの遺体を埋めるために、
その場所で戦った幾つかの戦闘を記念して建設したのかもしれない。
この最後の推論は、類似した半球天井が、〔中略〕ラワルピンディー
(Rawalpindi)、カイバル(Khaiber)峠、ペシャワール(Peshawar)、
ジェララバード(Jelalabad)、ラクマン(Laqmn)、カブールでもみら
れることからしても、より確実である。それらの全地点は、ペルシ
ア人や、ヒンドウスタン平原のなかにあるバクトリア人によって引
かれた道に位置する。さらに私は、これらの半球天井の大部分が、
通過するのに困難な、少なくとも敵国との対戦に好都合な、山道に
位置していることにも気づいた。それらのすべてが、墓のような土
饅頭であったという1つの事実は、とにかく確かである。私は、〔中
略〕それらの大多数のなかに、火葬の灰や人骨の破片を含んだ〔中
略〕少数の壺群を見出し出している。宝石群や、大体がグレコ=イン
ドまたはグレコ=スキタイのタイプによる硬貨群でもある⁸⁵⁾。

すなわちクールは、[大塔]を、ストゥーバだとは認識できなかった。彼は、[大塔]を、インダス河流域のヒンドゥーの王を埋葬した墳墓というよりは、ダレイオス3世の統治下のペルシア帝国の戦士か、バクトリア王国の戦士を埋葬した墳墓であろうと推測した。

プリンセブは論文のなかで、自らの見解として、「碑文が、[大塔]の建設意図を明らかにすることにつながらないとしても、クールがそれを写し取らなかったことは、残念である⁸⁸⁾」とのみ言及した。

つまりプリンセブは、クールの研究が資料不足であったと考えたが、論文において、クールによる[大塔]の建設意図にかんする見解を、自らの見解として発表した。

6. マッソンの論文(1837)

6-1. 論文の概要

マッソン(東インド会社の軍人、考古学者⁸⁷⁾)は論文「サンガラの史跡とアレキサンダーの祭壇にかんする示唆⁸⁸⁾」(『ジャーナル』第6巻, 1837)において、[ハラッパー(Harrappa)遺跡](以後[遺跡]と略記)について論じた⁸⁹⁾。

しかし論文の表題は、アレキサンダーが破壊した古都サンガラの砦と、彼が自らの遠征の最東端を記念して建設した[12神の祭壇]を彷彿とさせる。実際、論文では、[遺跡]の様相と地理的な位置とを、アッリアノスによる「サンガラの戦い⁹⁰⁾」と[12神の祭壇⁹¹⁾]にかんする記述と照合させ、アレキサンダーの足跡を検証している。

6-2. 目下の[遺跡]の様相について(図3)

マッソンは論文の冒頭において、「密林のなかの道を通るという長い行軍のあと、私たちは、ようやくハラッパーに到着した⁹²⁾」と記した。そして[遺跡]の様相について、説明した。要約すると、

村の東側には、牧草地があり、村の南側には、大円形の土手がある。また土手の西側には、岩でできた高台がある。高台は、建造物の残骸(碧眼をもつ壁の断片)で覆われているが、焼成煉瓦による古い砦が築かれている。砦の壁と塔群は、高くそびえ、壁の長さははかりしれないが、破壊されている。そして砦の北東側には、小さな湖がある⁹³⁾、と。

つづけて彼は、こうした[遺跡]の様相を、アッリアノスによる「サンガラの戦い」にかんする記述と照合させた。要約すると、

アッリアノスは、アレキサンダーが、カタエイ人⁹⁴⁾と対戦するために、古ヒュドラオテス(すなわちラヴィ(Ravi))川を横断したあと、ピンブラマ⁹⁵⁾で2日間休養し、3日目にサンガラに到着したと記した。サンガラでは、カタエイ人が、砦の向い側に位置する高台に、2輪戦車と荷馬車を楯にして、陣をはっていたと記した。また高台は、さほど高くもなく、湖も、さほど深くはなかったので、アレキサンダーが、自らの隊を、高台と湖のまわりに配置したと記した。それゆえアレキサンダーの軍隊は、容易に高台を占領できたし、湖を渡って逃げようとする敵も迎撃できたと記した。また彼の軍隊が、坑道を掘り、砦の塔群を崩したとも記している。目下の[遺跡]には、アッリアノスが陳述したように、塔群をもつ砦、湖、土手が確認できる。また土手の斜面は、緩やかであり、カタエイ人による防備手法に合致している⁹⁶⁾。そして古代名「サンガラ」は、「強固な砦」という意味であり、現在のヒンドゥーの言語では、「緑の町」を意味する。これは、目下の村の東側に位置する、牧草地に関連している⁹⁷⁾。それゆえ私は、いま、サンガラの砦と湖を見ているという、ま

たカタエイ人が二輪戦車で3重の列をつくり防御した土手を見ているという確信を得た⁹⁸⁾、と。

つまりマッソンは、[遺跡]が、インダス文明の時代の都市遺跡であることを認識できなかった⁹⁹⁾。彼は、目下の[遺跡]の様相が、アッリアノスによる「サンガラの戦い」にかんする記述と一致していることから、[遺跡]の城砦を、アレキサンダーが破壊した古都サンガラの城砦だと考えた。

6-3. [遺跡]の地理的な位置について(図1)

彼は論文において、[12神の祭壇]の建設地点を推測した。彼の見解を要約すると、

アッリアノスは、アレキサンダーの進軍が、古ヒュファシス(Hyphasis)川の土手で終えたと記している。それゆえ[12神の祭壇]は、ベヤス(Beyah、古ヒュファシス)川とサトレジ川とが合流した、ガールツラ(Gharra)川の土手に建設された。その地点は、[遺跡]から引いた1本の直線がガールツラ川と接する地点、すなわち目下の地図では、シカー(Sikh)地域とバハワルプール(Bhawelpur)地域とを分断したあたりである¹⁰⁰⁾、と。

ここでいう「ガールツラ川」とは、19世紀後半の英国人が作成した地図によると、ベヤス川とサトレジ川とが合流した川であり、現在、「サトレジ川」と呼ばれている。また、彼のいう「シカー地域」とは、ラホールから南西方向に行った、ラヴィ川沿いに位置する¹⁰¹⁾。

すなわちマッソンは、[12神の祭壇]が、本論文の図1のAのあたりに建設されていたと考えた。

つづけて彼は論文において、[遺跡]の地理的な位置を、[12神の祭壇]の建設地点から逆算して検討した。彼の見解を要約すると、

アッリアノスは、サンガラが、森林のなかにあり、[12神の祭壇]の建設地点から2日の行軍に位置すると記した。実際に、[遺跡]は、ジャングルのなかにある。またガールツラ川から27-30マイルの距離、すなわち2日の行軍の地点にある。それゆえ私は、アレキサンダーの足跡を発見したと確信している¹⁰²⁾、と。

つまりマッソンは、[遺跡]の城砦は、目下の様相のみならず、地理的な位置から検討しても、古都サンガラの城砦だといえるのである。

7. 結

1830年代、協会員バーンズ、プリンセブ、マッソンは、論文において、インダス河流域の建築について論じた。

バーンズ論文とプリンセブ論文では、[マニキヤラの大塔]が建っている村は、アレキサンダーが進軍した古都タキシラだと推測された。この推測を前提に、2論文では、インダス河流域の歴史のなかでも、アレキサンダーの進軍以降(または前後)におこった、「西方の外来民族」による動向が注視された。そして「マニキヤラの大塔」を、バーンズ論文では、バクトリア王国の君主たちを埋葬した墳墓だと推測された。プリンセブ論文では、ヒンドゥーの王を埋葬した墳墓というよりは、ダレイオス3世の統治下のペルシア帝国の戦士を、またはバクトリア王国の戦士を埋葬した墳墓だと推測された。

マッソン論文では、[ハラッパー遺跡]の城砦は、アレキサンダーが破壊した、古都サンガラの城砦だと考えられた。

こうした協会員たちによる解釈は、現在の知識をもって判断すると、多くの誤った認識を含んでいる。彼らは、インドの硬貨や仏教建築にかんする真相を正確に理解できていなかったし、インダス文

明についてはほとんど知識をもっていなかった。またそれに加えて、インダス川流域の歴史について、断片的な情報しか得ていなかった。

とはいえ、こうした限界を含めて、1830年代の協会員によるインダス川流域の建築にかんする研究では、建築が建っている村は、アレキサンダーが進軍した古都として解釈された。そして建築は、すべて、アレキサンダーの進軍に結びつけて解釈されていたわけではなく、ペルシア帝国による支配、アレキサンダーの進軍、バクトリア王国による支配という、「西方の外来民族」による動向に関連づけて解釈された。

こうした研究姿勢のあらわれは、前時代に抱かれていた起原論的な発想が希薄になり、「西方世界との接触」を重視したファーガソンのインド建築解釈に近づきつつあるという、協会のインド建築研究史におけるひとつの変換期を意味していると推測される。

注

- 1) 協会の名称は、Asiatick Society (1784-1825)、Asiatic Society (1825-32)、Asiatic Society of Bengal (1832-1935)、Royal Asiatic Society of Bengal (1936-51)、Asiatic Society (1951-) と改名された (The Asiatic Society: *Centenary Review of The Asiatic Society 1784-1884*, The Asiatic Society, Calcutta, "Part I", pp. 3-4, 1885(Reprinted in 1986))。
- 2) 彌永信美：他者としてのインド、現代思想、青土社、p. 176, 1994. 6
- 3) The Asiatic Society: *op. cit.*, "Part II", p. 1
- 4) *The Proceedings*, The Asiatic Society, 1799.12.5, 1800, 7.2
- 5) 長田俊樹：新インド学、角川叢書、pp. 35-36, 2002
- 6) The Asiatic Society: *op. cit.*, "Part II", pp. i-iv 協会は、協会員が寄稿した全論文を、62項目に分類している。そのうち、インド建築に関連した論文(協会の分類項目「古代の記念物」または「石窟」に分類された論文)は、1788-90年代が8論文、1800-10年代が0論文、1820年代が3論文、1830年代が33論文、1840年代が27論文である。また協会員が寄稿した全論文は、1780-90年代には147論文、1800年代には55論文、1810年代には25論文、1820年代には65論文、1830年代には709論文、1840年代には600論文ある。そして、インド建築に関連した論文が1つの分類項目に占める割合は、1788-90年代が約139.4%、1800-10年代が0%、1820年代が約143.1%、1830年代が約244.3%、1840年代が約139.5%である(*op. cit.*, "Part II", pp. i-ciii, "Part III", pp. i-lxxxvii)。
- 7) *op. cit.*, "Part II", pp. i-iv インダス川流域を研究対象とした論文は、建築の分野以外にも、協会の分類項目「硬貨」「歴史」「地理学」などにおいて、1780-1820年代に0論文、1830年代に13論文、1840年代に14論文ある(*op. cit.*, "Part II", pp. i-ciii, "Part III", pp. i-lxxxvii)。
- 8) ファーガソンは美術協会 (Society of Arts) において (1866)、「私がインドにいた20-30年前、インド建築にかんする課題はほとんど手をつけられていなかった。インドの建造物群の光景は、たしかにダニエルと他の人々によって公表されていたが、それらを分類するという試みはなされていなかったし、それらの時代や関係を示す古代遺物について、漠然としたありとあらゆる思いつきだけがはびこっていた (James Fergusson: *On the Study of Indian Architecture, JSA 15*, p. 71, 1866)」と言及した。そしてT・R・メトカルフは『帝国のヴィジョン』(1989)において、『インドと東洋の建築の歴史』(1876)は、インド建築をはじめて分類、体系化したものであり、「出版後の50年間、スタンダードなテキストであり続けた (Thomas R. Metcalf: *An Imperial Vision*, University of California Press, p. 24, p. 50, 1989)」と指摘している。
- 9) T・R・メトカルフは『帝国のヴィジョン』(1989)において、ファーガソン以前のヨーロッパ人は、「ロマン主義の時代の子供たちと同様、巨大な洞穴の殿堂がもつ(崇高な壮麗さ)に圧倒されたが、これらの建造物が「遠い過去に戻ることを精神に伝えることと、暗黒時代の巨大な作品群として一般的に眺められているわけのわからない宗教にたいする恐れをもって印象付けられた」ということ以外に何も言及することはなかった (T. R. Metcalf: *op. cit.*, p. 24)」と記している。
- 10) 前田耕作：後記、アレクサンドロス古道、前田耕作監修、前田龍彦訳、同朋舎出版、1985
- 11) 前掲書、p. 394 前田耕作は『巨像の風景』(1986)において、こうした「アレキサンダー・シンドロームは、帝国主義の予兆である (前田耕作：巨像の風景、中央公論社、p. 21, 1986)」とも記している。

- 12) J. Fergusson: *History Of Indian And Eastern Architecture*, London, vols. I-IV, 1876
- 13) *op. cit.*, vol. I, p. 51
- 14) アム川 (古オクソス川) 中流域地方で、アケメネス朝ペルシア帝国の一州をなしていた頃、ギリシア人が入植。のちにアレキサンダーによって征服され、その後は、シリア王国の支配下に入った。のちのB.C.256年、総督ディオドロス1世が自立してギリシア系バクトリア王国を建国した。しかし内紛と分裂、北方の遊牧諸民族の侵入によって、B.C.2世紀中葉前後から衰退し始めた。局地的な小王国は、B.C.1世紀中葉まで残ったが、B.C.140年頃のバクトリアの支配は、事実上スキタイ系のトラハ人の手に移った (グラント現代百科事典、学習研究社、1973)。
- 15) J. Fergusson: *op. cit.*, vol. I, p. 52
- 16) 拙稿：インド建築起源論の広がりについて、日本建築学会計画系論文集、no. 578, pp. 191-198, 2004. 4 拙稿：18世紀後期のアジア協会員によるサンスクリット文化観と建築、日本建築学会計画系論文集、no. 609, pp. 155-161, 2006. 11
- 17) アレキサンダーは、インダス川流域に、戦争と軍隊の駐屯以外に、ギリシアの植民都市を建設した。B.C.322年頃、チャンドラグプタは、マウリア王朝を建国し、アレキサンダーの死後 (B.C.323)、混乱状態にあったインダス川流域を併合した。B.C.306年、セレウコス1世 (Seleukos I, アレキサンダーの東方領の後継者) は、シリア国王になり、アレキサンダーの東方領の奪回を目指してインダス川流域へ進攻した。チャンドラグプタは、セレウコスの軍を迎撃した (B.C.305頃)。そして、シリア国王と講和条約を結び (B.C.302頃)、セレウコス1世の娘と結婚し、領土をアフガニスタン方面まで拡大した (The Asiatic Society: *op. cit.*, "Part I", p. 85 村田治郎：建築学体系4-II(東洋建築史)、彰国社、p. 21, 1979)。
- 18) 本論文は、この用語を、1830年代の協会員が使っていた、「原住民 (aborigines)」という用語に對置する用語として、ファーガソンによる『インドと東洋の建築の歴史』(1876)の「序章」の「移民 (Immigration)」節に記されている「西方の外来民族 (foreign race coming from the West)」という用語を引用した (J. Fergusson: *op. cit.*, vol. I, p. 30)。彼は著書において、「西方の外来民族」として、ペルシア人、ヤヴァナ人、バクトリアのギリシア人、スキタイ (シャカ) 人、クシャーン人、ムスリムをあげている (*op. cit.*, vol. I, pp. 27-31)。
- 19) The Asiatic Society: *op. cit.*, "Part I", pp. 85-87
- 20) 山本達朗編集：世界各国史10(インド史)、山川出版社、pp. 186-189, 1969
- 21) 「歴史」「古代遺物」という名称は、協会における分類項目の名称である (The Asiatic Society: *op. cit.*, "Part II", pp. i-ciii)。
- 22) Sir William Jones: The tenth anniversary discourse. On Asiatick History, Civil and Natural, *The Asiatick Researches*, The Asiatick Society, vol. IV, pp. 1-17, 1795
- 23) *The Asiatick Researches*, The Asiatick Society, vols. I-XX, 1788-1839(vols. XVII-XX being in two parts)
- 24) B.C.302頃、セレウコス朝シリア王国の大使として、マウリア王朝の首都パリボッタラにあるチャンドラグプタの宮廷へ赴いた (The Asiatic Society: *op. cit.*, "Part I", p. 85)。
- 25) ビハール (Bihar) 州の州都。コルカタ (Calcutta) の北西約460キロのガンジス (Ganges) 川右岸に位置する (グラント現代百科事典)。
- 26) ジョーンズは論文において、サンドラコトスは、アレキサンダーの陣中を訪れた (B.C. 325頃) 人物であり、アレキサンダーがインダス川流域に残したギリシア人入植者たちが殺害されたとき (B.C. 317)、マウリア王朝の君主であり、のちにセレウコス1世と講和条約 (B.C. 312) を結んだ人物でもあると指摘した。そして、サンドラコトスとチャンドラグプタとの同一性を根拠に、チャンドラグプタの即位年を、B.C. 317-312年だと結論づけた (W. Jones: *op. cit.*, p. 6)。
- 27) Lieutenant Francie Wilford: On the Chronology of the Hindus, *The Asiatick Researches*, The Asiatick Society, vol. V, pp. 241-296, 1798
- 28) The Asiatic Society: *op. cit.*, "Part II", p. 86
- 29) F. Wilford: *op. cit.*, pp. 280-281
- 30) この地域は、B. C. 330年 (ダレイオス3世の治世下)、ペルシア帝国の20管区のうちの第7管区に位置する (NHK 文明プロジェクトとその他8名: NHK スペシャル(文明の道(2ヘレニズムと仏教)), 日本放送出版協会、p. 179, 2003)。
- 31) Scythians B.C.8世紀-3世紀まで、黒海北岸の草原地帯で活動したイラン系民族。ボルガ川下流地方から西進し、南ロシアを占拠。B.C.7世紀には西アジアに侵入。B.C.6世紀、クバン地方の中心としてスキタイ王国を確立し、勢力をドナウ川流域にまで広げたが、B.C.3世紀、王国は崩壊した (グラント現代百科事典)。
- 32) F. Wilford: *op. cit.*, p. 266, pp. 282-287, pp. 288-289
- 33) The Asiatic Society: *op. cit.*, "Part I", p. 87

- 34) *op. cit.*, "Part II", p. 97
- 35) G・ダニエルとC・カンフルー：先史の概念，富井眞訳，京都大学，p. 1, 2001
- 36) 曾寿彦と西川幸治：沈黙の世界史(インド・死者の丘・涅槃の塔)，新潮社，pp. 41-42, 1971
- 37) 文学者。サンスクリット学者。インドの地方言語に堪能であった。ヒンドゥー・カレッジ（現サンスクリット・カレッジ）の設立（1791）に尽力を注いだ（O. P. Kejariwal： *The Asiatic Society of Bengal and the Discovery of India's Past 1784-1838*, Delhi, Oxford University Press, p. 82, 1988）。
- 38) Jonathan Duncan：An Account of the Discovery of Two Urns in the vicinity of Benares, *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol IV, pp. 131-133, 1795
- 39) *op. cit.*, p. 131
- 40) *op. cit.*, p. 132
- 41) Horace Hayman Wilson：Description of Select Coins, from Originals or Drawings, in the possession of the Asiatic Society, *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. XVII, p. 604, 1832
- 42) 1819-27 年にボンベイ知事に在位。30 年間のインド滞在経験と豊富な資料をもとに、『カブールの歴史(History of Cabul)』（1815）と『インド史(The History of India)』（1841）を出版した（宮原辰夫：イギリス支配とインド・ムスリム，成文堂，p. 59, 1998）。
- 43) タキシラの東方 34 マイルに位置する（前田耕作：後記，アレクサンドロス古道，前田耕作監修，前田龍彦訳，同朋舎出版，p. 58, 1985）。
- 44) [] は、固有名称を表わしている。
- 45) The Asiatic Society： *op. cit.*, "Part II", p. 7
- 46) 報告書は、H. H. Wilson： *op. cit.*, pp. 604-605 に添付されている。
- 47) 古物群のスケッチは、James Prinsep：On the Coins and Relics discovered by Mr. Ventura. General in the service of Maha` Ra`ja` Rnjit Singh, in the Tope of Manikyaya`la, *The Journal of the Asiatic Society of Bengal*, The Asiatic Society of Bengal, vol. III, pp. 321-322, 1834 に掲載されている。また報告書は、H. H. Wilson： *op. cit.*, pp. 600-603 に掲載されている。
- 48) H. H. Wilson： *op. cit.*, p. 601
- 49) *The Journal of the Asiatic Society of Bengal*：The Asiatic Society of Bengal, vols. 1-52, 1832-1935 (1832-1935) *The Journal of Royal Asiatic Society of Bengal*：Royal Asiatic Society of Bengal, vols. 1-73, 1936-1904
- 50) The Asiatic Society： *Centenary Review of The Asiatic Society 1784-1884*, The Asiatic Society, Calcutta, 1885(Reprinted in 1986)
- 51) The Asiatic Society： *op. cit.*, "Part II", pp. i-iv
- 52) Sir Leslie Stephen and Sir Sidney Lee： *The Dictionary of national biography founded in 1882 by George Smith*, Oxford University Press, vol. VIII, p. 901, 2002
- 53) Lieutenant A. Burnes：ON THE 《Topes》 and Grecian Remains in Panjab, *The Journal of the Asiatic Society of Bengal*, The Asiatic Society of Bengal, vol. II, pp. 303-310(p. 309, l. 3-7, 14-17), 1833
- 54) 注 53) にて既出
- 55) 村田治郎：前掲書，p. 63
- 56) 57) 田辺勝美と前田耕作編集：世界美術全集-東洋編(中央アジア)，小学館，第 15 巻，p. 428, 1995
- 58) J. Fergusson： *op. cit.*, p. 96
- 59) 古代ローマの歴史家・政治家。小アジアの北岸ピチュニアに生まれ、ローマの市民権を得て政治家となり、小アジアのカッパドキアの総督となる（グランド現代百科事典）。
- 60) アッリアノスは著書の「第 5 巻 8 節」において、「アレキサンダーは、インドス河畔から出発すると、ついでタキシラに至った。タキシラは大きな繁華な町で、インダス川とヒュダスベス川との中間にある町々のうちで最も大きい（アッリアノス：アレクサンドロス大王東征記，大牟田章訳，岩波書店，下巻，p. 36, 2001）」と記している。
- 61) アッリアノスは著書の「第 5 巻 19 節」において、「アレキサンダーは、合戦が行われた場所と、彼がヒュダスベス川の渡河に乗り出したその現地に、それぞれ町を建設することにした。1 つの町はインド人たちにたいする勝利から、その名をとって《ニカイア》と名付けられ、いま 1 つは、そこで死んだ彼の乗馬ブケパラスを記念して、《ブケバラ》と命名された（前掲書，pp. 59-60）」と記している。現在の知識をもって判断すると、ブケバラは、前進基地が設けられた、ヒュダスベス川の西岸側のジャラルプール（またはディラフル）に、ニカイアは、ヒュダスベス川の東岸側の合戦地（現在のモング付近）に建設されたと推測されている（前掲書，p. 329）。
- 62) A. Burnes： *op. cit.*, p. 309, l. 22-28
- 63) *op. cit.*, p. 308, l. 32-35
- 64) *op. cit.*, p. 308, l. 4-7
- 65) バーズの誤読と思われる。バクトリア人については、『周遊記』の「第 3 巻 29 項」に記述されている（アッリアノス：前掲書，pp. 257-259）。
- 66) A. Burnes： *op. cit.*, p. 310, l. 21-26
- 67) 前田耕作：前掲書，p. 394
- 68) Ed.：Further information on the Topes of Manikya`la, being a translation of an extract from a manuscript memoir on ancient Taxila, by Mons. A. Court, Engineer Officer in the Army of Maha`ra`ja` Ranjit Singu, *The Journal of the Asiatic Society of Bengal*, The Asiatic Society of Bengal, vol. III, pp. 556-562(p. 559, l. 1-6), 1834
- 69) *op. cit.*, p. 557, l. 31-p. 558, l. 7
- 70) 注 68) にて既出
- 71) Ed.：Further information・・・, *op. cit.*, p. 557, l. 5-12
- 72) Ed.：Extracts from a memoir on a map of Peshawar and the countries between the Indus and the Hydaspes, the Peucalaotis and Taxila of ancient geography, *The Journal of the Asiatic Society of Bengal*, The Asiatic Society, vol. V, 1836, pp. 468-482(p. 468, footnote)
- 73) 現在の知識をもって判断すると、クールがいう「インドの(Indian)硬貨」とは、クシャーナ朝硬貨であり（J. Fergusson： *op. cit.*, vol. I, p. 98）、「グレコ=ペルシアの(Greco-Persian)硬貨（または純粋なペルシアの硬貨）」とは、ササン朝硬貨である（*op. cit.*, p. 97）。両者はヴェントゥーラによって発掘された。またクールがいう「ラテン文字をもつ硬貨」とは、ローマ硬貨であり、「グレコ=インドの(Greco-Indian)硬貨（またはグレコ=スキタイの(Greco-Scythic)硬貨）」とは、クシャーナ朝硬貨である（*op. cit.*, p. 94）。
- 74) Ed.：Further information・・・, *op. cit.*, p. 559, l. 7-26
- 75) *op. cit.*, p. 559, l. 23
- 76) *op. cit.*, p. 559, l. 29-28
- 77) *op. cit.*, p. 562, l. 17-20
- 78) *op. cit.*, p. 562, l. 20-21
- 79) *op. cit.*, p. 561, l. 24-31
- 80) *op. cit.*, p. 561, l. 39-44
- 81) *op. cit.*, p. 562, l. 22-26
- 82) *op. cit.*, p. 562, l. 1-4
- 83) *op. cit.*, p. 558, l. 15-17
- 84) *op. cit.*, p. 561, l. 36-37
- 85) *op. cit.*, p. 557, l. 31-p. 558, l. 7
- 86) *op. cit.*, p. 556, l. 42-p. 557, l. 4
- 87) 1821 年、東インド会社の歩兵隊に入隊。のちにベンガル・ヨーロッパン・砲術隊（Bengal European artillery）に転任。1827 年、アーグラ(Agra)において脱走し、自分の名前を変えた。その後の 10 年間、西北インドで遺跡調査を行ない、8 万個以上の古物を収集した。1835 年、アフガニスタンで、記者として東インド会社の軍隊に入隊。1838 年、シンド(Sind)に移動し、『アリアナ古物(Ariana antiqua)』（1841）と『さまざまな旅行の物語(Narrative of Various Journeys)』（第 1-3 巻, 1840）を執筆。1840 年、アフガニスタンに戻る途中、バルチザンの反乱に巻き込まれ、英国に監禁された。1842 年、英国に帰国（Leslie Stephen and Sidney Lee： *op. cit.*, p. 237）。
- 88) C. Masson：Suggestions on the sites of Sangala and the altars of Alexander, *The Journal of the Asiatic Society of Bengal*, The Asiatic Society of Bengal, vol. VI, pp. 57-60, 1837
- 89) 近藤英夫と NHK スペシャル「四大文明」プロジェクト編：NHK スペシャル(四大文明(インダス))，日本放送出版協会，p. 150, 2000
- 90) アッリアノスは著書の「第 5 巻 22-24 節」において、サンガラへの行路とサンガラの戦いについて解説している（アッリアノス：前掲書，pp. 65-70）。
- 91) アッリアノスは著書の「第 5 巻 29 節」において、「アレキサンダーは軍勢を区分けすると、12 の祭壇を築くよう指示した。高さは巨大な塔ほどもあり、その幅にいたっては塔に見合うよりもさらにいっそう長大なものであった。彼としては自分を、これほどにも遙かな土地にまで勝ち進め給うた、神々にたいする感謝の捧げ物として、また自分の艱難辛苦を後の世まで伝える記念物として、これらを築かせたのである。[中略]。祭壇が完成するとアレキサンダーは、[中略] ヒュドラオテス川を目ざして軍を反転させた（前掲書，p. 85）」と記している。
- 92) C. Masson： *op. cit.*, p. 57, l. 31-32
- 93) *op. cit.*, p. 57, l. 31-p. 58, l. 11
- 94) Kathaei その住地は明らかではないが、現ラホールと現アムリツタルを含む地域だと推測されている（アッリアノス：前掲書，p. 331）。
- 95) Pimprama 現ラホール、あるいは現アムリツタル近郊に推定する説があるが、不祥（前掲書，p. 331）。
- 96) C. Masson： *op. cit.*, p. 58-l. 23-p. 59, l. 23
- 97) *op. cit.*, p. 60, l. 25-30
- 98) *op. cit.*, p. 58, l. 17-22
- 99) 曾寿彦と西川幸治：前掲書，pp. 41-42
- 100) C. Masson： *op. cit.*, p. 60, l. 3-15
- 101) M・マーチン：CABOOL, ジョン・タリス世界地図，井上健監訳，同盟舎出版，1992
- 102) C. Masson： *op. cit.*, p. 60, l. 15-17, 37-40

出典図版

- 〔図 1〕 著者作成
- 〔図 2〕 J. Fergusson： *op. cit.*, p. 97, p. 98
- 〔図 3〕 曾寿彦と西川幸治：前掲書，p. 39, p. 117 をもとに著者作成

（2010 年 5 月 10 日原稿受理，2011 年 4 月 5 日採用決定）